

余話

夜汽車

まだSLが走っていた頃。上野行きの片道切符を握り、鈍行の夜汽車に乗ったのは二十二歳の春であった。無謀とも言える渴望の若さは、自己の才能を量ることのないまま、ただ、最高学府で学びたいという一心が、ルビコン川を越えさせたのだった。

直前に心の裡うちを明かした職場の仲間たちは抱腹し、雇い主は冷笑を餞別せんべつとしたことを忘れない。それでも明日の希望と夢を思えば、これらの嘲笑はむしろ激励になったと記憶する。古来、稗史はいしに登場する人物の多くがそうであったように、この念おもいを天が助けないはずはないという信仰にも近い思ひは、このとき揺ぎ無い確信となっていたからである。

ところが、青年の考える世の中はそんなに甘いものではなかった。初年度は生活苦から早々に休学に追い込まれた。衣食住の歳費、授業料、教科書、必要な書籍、これらの捻出に、慣れない都会暮らしは精神までも貧困にした。翌年、一念発起して覚悟の復学。ここでは尻尾を巻いて蔑視と嘲笑の渦中に戻るわけにはいかない。国電は三駅を歩くこととし、夕食は学食の素うどん一杯とした。それでも休日には、日帰りの範囲で多くのものを見聞した。今考えれば年頃の

男に女性の友だちが一人も居なかったというのは、むしろ不自然でさえあったろう。私には初めての都会生活で心に余裕がなかったし、女は怖いものだという先入観があったからかも知れない。でも、東京には一千万の人が居てその半分は女性なのだ。でも、田舎にいた頃父がよく云っていた「東京は生き馬の目を抜くところ・・・」が骨の髄まで沁みこんでいたのだ。志を果たしたら一日も早く郷里に戻りたい。キュウピットはそれを知っていて、誰も矢の的に選ばなかったのかも知れない。

二年目、運良く育英会の特奨生に合格した。教師の道が実現しなかったとしてもそれ以上に、どの講座も講義も新鮮で大学での講義は楽しかった。教授陣は国公立大学を問わず昼夜掛け持ちの方々が多かったが、「二部の学生は熱心で講義の仕甲斐がある」と手を抜かない講義を展開して下さいました。三コマ九十分の授業はしばしば超過した。我々は苦情どころか帰りの電車を気にしながらも、一字も板書せずただ滔々とうとうと講義する「森本治吉教授」の「万葉論」を、指先が戻らなくなるほどペンを握り締め懸命に筆記した。「教育概論」は山形訛りの「菅野芳彦教授」。この方の講義は溢れるほどの情熱が込められていたと印象に残る。卒業の時まで面倒を見てくれて、大

学院に残ることを薦めて下さり、教員希望の私を万一の時はいって長崎県の女子高校の教員にお世話をして下さった方でもある。「暉峻康隆教授」の「江戸文学」の講義は面白くて時間が経つのを忘れるほどであった。他に「樺 俊雄教授」は、デモに巻き込まれた美智子さんを亡くしたばかりであったが、娘さんのことには一切触れられなかった。これらの教授陣は自分が選んで出会った方々ではなかった。私の大学の選択は極めて不純で、受験雑誌で授業料の最も安い大学を選んだだけだったのである。中でも幸運は、後に母校の学長・総長になられた「高木市之助」教授の漢文の講義を二年間受講できたことであつたろう。見事に板書された漢詩を朗々と吟じていた声は今も耳に残る。大学生活は充実していた。教室には全学連が毎日のようにオルグに来たが、我々二部の学生にはデモに参加する時間も生活の余裕もなかった。昭和三十九年の東京オリンピックは応援も観戦することもなく、学食の白黒テレビの画面でチラチラと観ただけであった。

一方、毎日午前四時の起床から就寝0時の五年間の生活は、喜怒哀楽を超越して未熟な魂を大いに成長させてくれた。蒸気機関車が、意志もって既成の風景をかき分け新しい世界を求め続けるように、

あの頃は、未知について学ぶことに貪欲であった。毎日の生活は発見と感動の連続であったように思い出される。仕事で汗を流した後には作業着のポケットに忍ばせた大学のバッヂをそつと確認した。

在京の五年間、私から離れることがなかったのは、貧乏と飢えと睡眠不足であった。大病も経験したが、老医師は治療費を受け取らなかつた。友人の差し入れ、大家さんの心遣いも全快を早くしてくれた。世の中は一見冷たいように見えても、優しさや温かさを十分に内包しているという真実を実感させ証明してくれた。このことは、その後の人生に得難い、そして、貴重な財産として残った。十八種もの仕事とそれに伴う経験はそれぞれに辛さと厳しさを伴いながらも意味を持っていたのである。

ある年の出来事である。糾える縄は文字通り禍福を共存していた。粗末な借家に、もの盗りがしのび込み有り金を盗られたことがあった。僅かな金額でも私の全財産だった。ところが、それから三カ月後、東京都が道路を拡幅するという理由で私の部屋も引越しを余儀なくされた。その移転料は何と毎月の部屋代の一年分だったのである。棚ボタどころではない。飲まず食わずの者が馬を手にしたようなものである。電車の窓越しに見ていたネオンの華々しい店に入っ

た。ホステスは注文もしない酒を瓶ごと持って来てテーブルの上に置いた。さすがの田舎者も不気味さを感じ早々に引き上げることにしたが、支払いは持ち金の大半となった。やはり生き馬の目を抜く魔女は居たのだ。後悔は先に立ちはしない。禍は常に自らが作り出すことを身をもって知らされた出来事ではあった。貧乏生活がまた始まった。すべて世の中の帳尻は合うように出来ているらしい。

幸い卒業と同時に母校の教諭として採用になった。教師になって数年が経った時、上京するときのあの雇い主が、夜不意に家を訪ねて来たことがあった。大学入試の近づいた末の娘さんの家庭教師にという依頼であった。かつて、少年の頭を幾度となく殴ったことのあるその同じ手は、玄関の上がりかまち框につかれています何とも不思議な構図であった。この意外さは、学問とはそれほどに尊く価値のあるものであったのだと、改めて知らされた出来事でもあった。

かつての少年たちが壮年期を迎えた中学校の同期会で、友人たちが異口同音に私に浴びせた言葉は「あんたが？・・・考えられない」と判を押したような疑問符であった。それもそのはず、成績不良で行儀の悪い悪戯坊主いたずらぼうずが、他人様に学業を教えるなどと想像することひとは、想像外というより拡大解釈しても許容の外であったに違いない

からである。人生では起こり得ないことが起こるものなのである。天が準備してくれた条件もさることながら、要は自分自身の意志と決断がコインの表裏を決めるのかも知れない。人生という道は予め用意されているものではなく、原野に自分の足跡で道を作って行くようなものなのだ。

公立高校教諭となった時、高まる胸中に固く決意したことは、生涯にわたって学問を続けること。そして、出会った生徒諸君には公平無私な愛情を注ぐということであった。時が経ち、時折訪ねてくれる卒業生が語る片言は、今となって、どんな勲章や褒章より重く価値がある。神様のイタズラで教職の大部分を不似合いな進学校で過ごさせて頂き、生徒諸君に鞭を入れられ、自分自身が受験生となった結果である。

つい夢中になり、教科書を九ヶ月で終わり、そのあと使用した文庫本の吉野セイ女史の「はな涙をたらした神」が大学の入試問題に出て、ぞくげん図らずも私は伝説の主人公となった。俗諺に「教員と物貫いは三日やったら止められない」というのがあるが、この意味の真髓を理解できるようになるには、さらに精進の一筋の道を歩いていくより他はないようである。夜汽車の冒険から長い長い歳月が経った。